

機関番号：42658	
研究種目：若手研究（B）	
研究期間：2009～2010	
課題番号：21720046	
研究課題名（和文）	レコード音楽の表現形式に関する理論と分析方法の構築： 空間表現を中心に
研究課題名（英文）	Research for Theoretical and Analytical Approaches to the Forms of Recorded Music: On Spatial Expression of Sound
研究代表者	
	谷口 文和（TANIGUCHI FUMIKAZU） 亜細亜大学短期大学部・経営科・講師 研究者番号：50535515

研究成果の概要（和文）：録音技術を駆使して制作されるレコード音楽が、その場で演奏される音楽とは異なる独自の表現形式を持つことについて、空間表現に焦点を当てて論じた。音が鳴り響く現実の空間と、音によって表現される空間との関係を理論化し、その関係に応じて複数の「空間経験のモード」が存在することを明らかにした。また、レコード制作者が自分を「音楽の作り手」と認識する上で、この空間経験が持つ意味についても考察した。

研究成果の概要（英文）：This study discusses the forms of recorded music, which is distinct from live music, focusing on the spatial expression of sound. It theorizes "the modes of spatial experience" or how one hears the spatial expression of recorded music in the real space. It also discusses the significance of this spatial sense for producers of recorded music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000円	210,000円	910,000円
2010年度	600,000円	180,000円	780,000円
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000円	390,000円	1,690,000円

研究分野：音楽学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学、音楽理論、ポピュラー音楽研究、レコード音楽、メディア表現、録音技術史、空間表現、空間経験

1. 研究開始当初の背景

こんにち触れることのできる音楽表現の大半は、音の響きを録音メディア上で加工・編集する技術を用いて生み出されている。そのように録音物として制作される「レコード音楽」には、その場の演奏による音楽、すなわち「ライブ音楽」とは根本的に異質な表現形式があると考えられる。両者はそれぞれ、その場で演じられる演劇と、カメラワークや

フィルムの編集を通じて制作される映画にたとえることができる。その意味で、レコード音楽は映画やアニメーション、漫画、ビデオゲームなどと並んで、特定のメディアを活用して生み出される「メディア表現」の一種と位置付けられる。

しかしながら、演劇と映画が、演劇と映画が、たとえ同じ原作にもとづいていても別の分野であり別の表現形式を持っていると一般的にも理解されているのに対して、レコー

ド音楽とライブ音楽はどちらも単に「音楽」と呼ばれることが多く、両者の表現形式上の違いはいまだ十分に認識されていると言いはない。したがって、両者の違いを明確にするような理論的整備が必要である。

とはいえ、近年の映画研究や漫画研究において表現の理論化が非常に活発化しているのに比べても、音楽学ではレコード音楽を分析するための理論枠組がいまだ確立されていない。何故なら従来の音楽理論は、楽譜という別のメディアに依存しながら、音楽を音の自律的な構造として扱ってきたからである。そのため、レコード音楽の表現形式に焦点を当てようとするならば必然的に、楽譜に表すことのできない音の表現要素をいかにして対象化するかという理論的課題は避けて通れない。

この点をめぐる議論は、主に1980年代以降のポピュラー音楽研究において展開してきたが、そこではレコードに記録された音声データを、楽譜と同様の「テキスト」として扱おうとする傾向があった。しかし、楽譜に書かれた音符が抽象的な構造を指し示す記号であるのに対して、録音された音は、実際に聞こえる、あるいは感じられることを通じて、そのような表現があるのだと認識されるものである。したがって、レコード音楽をテキストとして扱うことの妥当性は、人がどのように音を経験するのかという問題意識にもとづいて検討されなければならない。

以上のような課題に取り組むために、本研究では音を通じた空間経験の問題に焦点を当てる。オーディオ装置で再生される音は、その音が鳴り響いている現実の空間とは別の空間を感じさせることがある。そのようなレコード音楽の空間性という論点は、次の二つの意味で上記の問題関心を掘り下げるのに適している。第一に、従来「音楽そのもの」から切り離され、そのコンテキストの問題として扱われがちであった空間表現に着目することで、録音された音から現実とは別の空間を生み出すレコード音楽独自の表現形式を浮かび上がらせることができる。第2に、レコード音楽におけるこの「現実の空間」と「表現された空間」の関係は、視覚中心のメディア表現と比較し、違いを理解するのに適した要素であると考えられるからである。

そこで本研究では、「音楽」に対する従来の見方を一旦保留し、音のあり方という次元にまで立ち返ったところから、表現における録音メディアの作用について研究するという立場をとる。

2. 研究の目的

(1) レコード音楽を、映画や漫画、ビデオゲ

ームなどと並ぶ「メディア表現」と位置付け、分野間の表現形式の比較を可能にするための理論的基盤を構築する。特に、メディア上に表現として生み出され受け手が経験する空間という要素に着目し、現実の空間と表現された空間がどのような関係にあるのかを図式的に理論化する。

(2) レコード音楽の歴史において現れた様々な空間表現の手法が、聴き手の音楽経験にどのような効果をもたらしているかを明らかにする。そして、(1)で示した現実の空間と表現された空間の関係をめぐる理論枠組にもとづいて、その経験を類型化する。

(3) 上記2点の議論をふまえて、レコード音楽の制作環境の変化と、そこから生み出される空間表現との相互作用を明らかにする。特に、自宅などの私的空間で音楽制作を行う「自宅録音」の実践に着目し、録音に特化したスタジオという空間との違いが、レコード音楽の制作者における空間表現の理解にどのように表れているかを分析する。

3. 研究の方法

(1) これまでもっぱら音響学的な側面から研究されてきた音の空間的なあり方について、経験という観点から再検討した。音は物理的な意味で鳴り響く空間の広さや特性を反映していると同時に、人が呼び掛けられた時にその声の質から相手との距離を感じるように、人と物事との慣習的な関わり、道具の使用、対象への社会的意味付けといった文化社会的側面を併せ持っており、音の経験は両者の重なり合いのもとに生じる。そこで本研究では、録音された音の空間性に関しても、物理的に音響の特徴を分析するのではなく、音を通じて現れる存在感や臨場感、いわゆるリアリティに対して、録音技術がどのように作用するかという点に照準する立場をとることを確認した。

(2) 現実の空間と表現される空間の関係について、映画や漫画といった他のメディア表現と比較する視座を得るために、各分野の理論的研究を参照しつつ整理した。映画では画面、漫画では冊子のページといったように、各分野における表現形式の理論は、それぞれの表現にとって土台となるメディアによって用意されるフレームを前提として構築されている。本研究では分野間の比較のために、①メディアが置かれている現実の空間、②表現が構成されるメディア上の空間、③メディアを介して触れることのできる作品内の空間、という三つの空間の層を設定した。そし

て、受け手がある作品を享受する際に、①の空間にいる受け手が②を介して③を経験する、という図式を用いて、レコード音楽と他のメディア表現形式を比較し、レコード音楽の特徴を検討した。

(3) レコード音楽の歴史において現れた音の空間表現技法について、各時代において画期的あるいは象徴的とされる作品や、聴き手の置かれた状況を物語るエピソードを取り上げ、上記(2)で用意された理論枠組に従って空間経験のあり方を考察した。その際、作品を自律した表現として扱うのではなく、その制作環境や再生環境も考慮に入れて、録音された音が聴き手にとってどのようなリアリティを持ち得るかを論じた。

(4) 研究目的の(3)で示した音楽制作環境と空間表現との相互作用について、「自宅録音」の実践を一つの題材として取り上げて考察した。日本では1970年代からアマチュア音楽家の間で「自宅録音」が盛んになるが、今回は1970～80年代のオーディオ雑誌・音楽雑誌を主な資料として、誌面で紹介されている録音機器操作の技法や音楽家の語りから、「レコード音楽の作り手として音を聴く」という経験のあり方を分析した。

4. 研究成果

(1) 「現実の空間」と「表現された空間」の関係について、視覚中心のメディア表現とレコード音楽とを比較した結果、以下のような見解を得た。

視覚的な経験において、①メディアが置かれている空間と②メディア上に表現される空間は「表現を構成するフレームの外部／内部」の関係にあり、③表現された作品内の空間は、言わばそのフレームの「向こう側」に見えるものである。一方レコード音楽においては、②レコードに記録された音の再生によって聴き手が感じることで③の空間は、オーディオ装置と聴き手がいる①の空間と重なるように、言わば「こちら側」に現れる。また、レコードの再生音の聞こえ方は、再生環境によって強く左右される。漫画のページや映画の画面といった視覚的メディアが、現実の空間において見るべき対象を固定する作用を持つのに対して、オーディオ装置はそのような作用が弱いと言える。したがってレコード音楽の空間経験に関しては、三つの空間の層を単純に「こちら側」から「向こう側」へと直線的に並んでいる図式を想定することができない。

そこで本研究では、聴き手の経験において①と③が②を介して取り結ぶ関係が複数あ

るもと考え、これを「空間経験のモード」として概念化した。そして、レコード音楽の聴取において、それぞれの状況に応じて聴き手がどのようなモードで空間が経験しているかを分析するという理論的立場を明確にした。

(2) 上記の理論枠組にもとづいて、19世紀後半から続く録音技術の段階的発展とともに、レコード音楽の空間経験のモードがどのように変化してきたかを考察した。その結果、次のような類型が得られた。

① アコースティック録音の時代には、蓄音機は現実の空間において、声の主や演奏者といった「音の発生源」になり代わるものとして位置付けられた。すなわち、録音物は現実の空間とは異なる独自の空間性を確立していなかった。

② 電気録音によって小さな音も録音が可能になると、録音された音同士に音量の大小による遠近感が生じ、マイクロフォンの配置を工夫して空間が演出されるようになった。そのようにしてレコード上に生み出された空間は、壁に掛かる絵画のように現実の空間の中に現れた。

③ 録音スタジオの設備や電子的加工によって音の残響成分が微細に操作できるようになるにしたがって、音の鳴り響く空間を擬似的に生み出すことがレコード制作過程の一部となった。これと並行して、オーディオの「高品質＝忠実」な再生においては、そこがあたかも現実とは別の空間であるかのような聴取経験が理想とされた。「臨場感」と呼ばれるこの空間のリアリズムは、レコードがある実在の空間を忠実に記録しているために生じるのではなく、聴き手の側が現実の空間と表現された空間を重ね合わせるような経験のモードによって支えられているのだと言える。

④ 20世紀後半に上記のリアリズム的空間表現が確立される一方で、現実にはあり得ない残響・反響を伴った音楽表現も数多く生み出された。特に1980年代以降には、雑多な再生環境でも等しく効果的に聞こえるよう各パートをすべて大音量でレコード化する傾向が顕著となるが、その音からは遠近感を失った、極端にデフォルメされた空間が出現する。ここに至ってレコード音楽は、現実さながらの空間性というリアリズムとは根本から異なる、レコードだからこそ経験できる空間表現を確立したのだと考えられる。

(3) ここまでに明らかにした空間経験のモ

ードの類型を応用しながら、レコード音楽の作り手であるというミュージシャンシップをめぐって、音楽制作環境の空間性がどのような意味を持つのかを考察した。

録音スタジオという空間やそこにある録音機器を用いてレコード上に空間を表現する録音エンジニアにとって、特権的な立場で音に関わることのできるスタジオはミュージシャンシップの資源となっている。一方で「自宅録音」の音楽家は、そのような特権的な空間を持たないことを何らかの仕方で埋め合わせることが求められる。その手段の一つとして、日常的な空間を「録音する空間」へと読み替えるための技法が追求されたが、それぞれの関わる空間の違いが「プロとアマチュアの差」として認識されていた。

しかし 1980 年代に前述のデフォルメされた空間表現が定着すると、スタジオはその特権性を失う。この新しい空間経験のモードにおいてスタジオの空間が参照項とならないことにエンジニアが困惑を述べる一方で、アマチュアにとって当初は代替手段であった電子音響による擬似的な空間表現の技法が、新たなミュージシャンシップの源泉となっていた。結果として、「自宅録音」の音楽家はスタジオのエンジニアとの落差を前提としない、新たなミュージシャンシップを形成するに至ったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ⑤ 谷口文和、レコード音楽がもたらす空間――音のメディア表現論、RATIO SPECIAL ISSUE 思想としての音楽、講談社、査読無、2010、pp. 240-265.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 文和 (TANIGUCHI FUMIKAZU)
亜細亜大学短期大学部・経営科・講師
研究者番号：50535515

(2) 研究分担者

なし

(3) 研究連携者

なし